

「に対して」の意味と用法

横田 淳子

(2005. 10. 31 受)

【キーワード】 「に対して」、複合助詞、「について」、「にとって」

1 はじめに

「に対して」は、複合辞、後置詞、複合格助詞、格助詞相当句などとも呼ばれているものの一つであるが、本論では複合助詞と呼ぶこととする。日本語教育では、複合助詞は一般に格助詞を導入した後で扱われる中級項目の一つとなっている。「に対して」は動作・行為・態度の対象や目標を表し、書き言葉の中でよく使われ、ほぼ格助詞「に」に置き換えられるものとして教えられることが多い。しかし、学習者の誤用には、格助詞「を」や「に」との混同、複合助詞「にとって」や「について」との使い分けに関するものがある。単に対象を表すといった意味の説明からだけでは「に対して」の正しい使い方が把握しにくく、使い分けが難しいのであろう。本論では、「に対して」の基本的な意味を検討・確認した上で、「を」「に」「にとって」「について」との使い分けについて考察する。なお、名詞を修飾する「に対しての」や「に対する」に関する誤用も見られるが、本稿ではこれについては扱わず、別の機会に論じることとする。

2 動詞「対する」の意味

「対して」や「に対して」は一般の国語辞典には見出し語として出ていない。名詞を修飾する場合には、「外国人に対しての偏見」のように「に対しての」が使用されることもあるが、「外国人に対する偏見」のように「に対する」がよく使用される。これは動詞「対する」が連体修飾節の中で使用されている形だとも考えられる。「に対してのN」も「に対するN」も同様な意味で使われていることから、複合助詞「に対して」には動詞本来の意味が残っていると言える。

同じように複合助詞とされている「にとって」や「について」は、「にとってのN」や「についてのN」しかなく、「にとるN」や「につくN」という形はない。つまり、「について」や「にとって」はすでに助詞化していると言える。それに比べると、

「に対して」は動詞本来の意味をかなり残していると考えられる。

森田・松木（1989）は、「に対して」について「動詞『対する』の“他のものに向かう、応じる”意を引きつぐため、目標を示すといった方向性や、相対する人物・事物への反作用性などが示唆されることが多い」と述べ、「に対して」が動詞「対する」の意味を強く残していることを指摘している。

以上の点から、はじめに動詞「対する」の意味を検討することとする。意味分類のもっとも細かい『広辞苑』の記述を基準とし、「対する」の各辞書での意味記述の違いを調べると、表1のようになる。『大辞泉』は意味の記述順序は異なるが、意味分類は『広辞苑』とほぼ同じである。各辞書の列の丸数字は辞書の記述順の番号を示す。

表1 「対する」の各辞書での意味記述

	広辞苑	大辞林	現代例解	大辞泉	基本動詞	岩波
(1)向かい合う	①	①	①	①	①	①
(2)対比する	②	④	②	⑥	⑤	
(3)対になる	③	④	②	⑦	③	①
(4)対象とする	④	②	③	②		②
(5)こたえる	⑤		④	⑤		②
(6)応対する	⑥	③	④	③	②	②
(7)争う、抵抗する	⑦	⑤	⑤	④	④	②
(8)関わる		⑥	③		⑤	②

現代例解：『現代国語例解辞典』

基本動詞：『日本語基本動詞用法辞典』

岩波：『岩波国語辞典』

辞書で挙げられている例文を見ると、現代文では「に対して」や「に対するN」の形が多く、終止形での例文は、「(6)応対する」と「(7)争う、抵抗する」の意味のものだけである。『広辞苑』では、(6)では「にこやかに客に対する」が、(7)では「優勝候補と対する」が例文として載っている。他の辞書もほぼ同様の例文が挙げられている。このことから、動詞「対する」の意味はいくつかに分類できるが、用法としては述部に来るよりも複合助詞の形になったものや連体修飾の形をとるものが多いことがわかる。この点で、動詞「対する」は「行く」とか「遊ぶ」などの一般の動詞とは異なっていると言える。

なお、挙げられている例文は「優勝候補と対する」以外はすべて「に對する」「に對して」と「對する」の前には「に」が使われている。「優勝候補と對する」と同じ意味の例文として「最強チームに對する」と「に」が使われているものもあった。

いずれの辞書も第1の意味としては「(1)向かい合う」を挙げていることから、「對する」の一義的な意味は「向かい合う」であると言える。記述の順番は異なるが、どの辞書でも挙げている他の意味は「(3)對になる」「(6)應對する」「(7)争う、抵抗する」の3つである。

各辞書がどのように意味分類しているかは視点の違いによると考えられる。『岩波』の記述を参考にもっとも細かい『広辞苑』『大辞泉』の意味分類を考えると次のようになる。

「對する」という状態には、(A)二つのものが向かい合う場合と(B)一方が他方を相手とする場合がある。(A)二つのものが向かい合う場合からは、「(1)向かい合う」のほかに「(2)對比する」と「(3)對になる」が出てくる。「(2)對比する」と「(3)對になる」とを一緒の意味項目にしている辞書(『大辞林』『現代例解』)もある。

(B)一方が他方を相手とする場合からは、相手(必ずしも「人」とは限らない)の種類によって「(4)対象とする」「(5)応える」「(6)應對する」「(7)争う、抵抗する」の4つの意味が出てくる。「(4)対象とする」の相手は、物理的・心理的作用の受け手や作用の及ぶ先であり、積極的な働きかけはしてこない相手である。例えば、「将来に對する不安」の「将来」や「途上国に對する援助」の「途上国」がそれである。

「(5)応える」の相手は積極的な働きかけをした、またはしている相手である。「質問に對して答を出す」の「質問」がそれである。「(6)應對する」の相手は相手がある場合で、「優しく生徒に對する」の「生徒」がそれである。「(7)争う、抵抗する」の相手は敵として争ったり、抵抗したり、立ち向かう相手である。「優勝候補と對する」の「優勝候補」がそれにあたる。

「文学に對する興味」のような「對する」に関しては、『広辞苑』『大辞泉』では独立の項目として扱っていない。この「對する」は、「文学」そのものは積極的な働きかけはしておらず、興味の向かう先が「文学」であることを意味していることから、上述の「(4)対象とする」相手の中に入れることができる。『現代例解』では心的な傾向が「他のものに向かう」としている。他の辞書では、別の意味項目「関わる・関する」を立てたり(『大辞林』『基本動詞』)、「に對して」の形を取り上げ、その中で「について」「それに関して」を意味として出したり(『岩波』)している。こ

の「対する」は「に対して」となったとき、「について」とほぼ同じ意味で使えるため、「について」と言い換えが可能といわれているものであるが、これについては後で詳述する。

以上、6つの辞書の検討から、動詞「対する」の意味は7つにまとめられる。

- (A) 二つのものが向かい合う場合
 - (1) 向かい合う
 - (2) 対比する
 - (3) 対になる
- (B) 一方が他方を相手とする場合
 - (4) 対象とする、対象に向かう
 - (5) 応える
 - (6) 応対する
 - (7) 争う、対抗する

3 「に対して」の先行研究

従来の研究（グループ・ジャマシイ 2001、河原崎 1995、国立国語研究所 2001 など）では、「に対して」には「対象」、「割合」、「比較・対照」を表すという3つの基本的な意味・用法があるとしている。

「対象」は、前節で述べた動詞「対する」の「(B) 一方が他方を相手とする場合」の(4)から(7)までのすべてを含むものであり、幅が広い。「に対して」が「目標を示すといった方向性」（森田・松木 1989）を示唆するのは動詞「対する」に「(4) 対象に向かう」の意味があるからであり、「相対する人物・事物への反作用性」（森田・松木 1989）は同様に「(5) 応える」と「(7) 争う・抵抗する」の意味があるからであると考えられる。また、「名詞部分が人をあらわしていて、『～に対して』は態度を示す相手をさしだしている」（佐藤 2001）とするのは、動詞「対する」に「(6) 応対する」の意味があるからと考えられる。

「割合」、「比較・対照」の意味・用法は、前節で述べた動詞の「(A) 二つのものが向かい合う場合」から出てきたもので、「割合」は動詞の「(3) 対になる」からであり、「比較・対照」用法は二つのものを「(2) 対比する」から出てきたものであると考えられる。

「対象」を示す場合は、グループ・ジャマシイ（2001）では『ものごとに向けて／応じて』などの意味を表し、後ろにはそれに向けられた行為や態度など、なん

らかの働きかけを示す表現が続く」とされ、佐藤（1989）では「主体が示す態度の向かっていく対象」とされているように、主体が示す態度・感情・行為・動作の対象を表すとしているものが多い。つまり、「対象」を示す場合は、従来の研究では、主体は意志をもった人またはその集合体である団体・機関などと考え、分析しているのである。

これに対して、深尾・馬場（2000）、馬場・深尾（2004）は理系論文に使用される「に対して」の用法を分析した上で、従来の用法の分類では不十分なことを指摘し、「対象に対して～を動詞」の形で「化学的・物理的处理」を表す用法や「対象に対して形容詞・形容動詞」の形で「ある対象に対する化学的・物理的特性」を示す用法などを挙げている。これは、理系論文に現れる文において、意志をもたない物質や現象が主体となる場合、「態度や行為の対象」としては分類することができないからである。深尾・馬場は化学的・物理的处理や特性を表す用法のほか、「相対的位置関係を示す語の位置基準」、「数学的处理を表す動詞の基準」、「幾何学的関係を表す動詞の基準」などを示すといった理系特有な用法も指摘している。

4 「に対して」の意味分類

以上概観した「に対して」の先行研究と動詞「対する」の意味分類を踏まえて、複合助詞「に対して」を分類すると以下ようになる。

A 「二つのものが向かい合う場合」

1 二つを比較する

二つのものがどのように違っているかを述べるときに、比較の意味が出てくる。文を受ける場合は「の」を使って名詞化し、「のに対して」となり、前文を受けるとは「それ（これ）に対して」となる。

- ・失業率は、今年の6.3%に対して今年5.8%と低くなっている。
- ・姉が活発でスポーツ好きなのに対して、妹は物静かで読書好きだ。
- ・日本ではあまり話さないほうがいいとされている。それに対して、欧米では自分の意見を積極的に述べるように教育されている。

2 二つを照応・対応させる

二つのものがどのように対になっているかを述べるとき、対応関係を示す。この用法は理系の実験結果を述べるときなどに使われる。

- ・活性化エネルギーの値はPdH0.62に対して6.1J/molであった。（深尾・馬場2001より）

3 割合を示す

二つのものがどのような割合で対になっているかを述べる時、割合の基準を示す。特に基準量を1と決めて述べる時には単位を表すことになる。

- ・配分は東京都5に対して神奈川県3、千葉県2とした。
- ・子供1人に対して年間10万円の教育費が必要だ。

4 位置を表す基準を示す

二つのものがどのような位置で向き合っているかを述べる時の基準位置や物体を示す。理系分野だけでなく、一般的文でも使われる。

- ・地軸は地球の公転する面に対して傾いている。
- ・傾斜面に対して体の中心が垂直になっていることが重要である。

B 「一方が他方を相手とする場合」

5 態度・感情など心の動きの対象を示す

主体は人、述語は態度・感情を表す動詞や形容詞である。

- ・父は子供に対してやさしかった。
- ・人々は年金問題に対して無関心だ。
- ・文学に対して興味をもつようになった。

6 反応・作用の対象を示す

主体は心や意志をもたないモノであり、述部には「強い」「弱い」「有効だ」など状態を表す言葉が来る。理系論文では科学的・物理的特性を表すときに用いる。

- ・木材は火に対して弱い。
- ・この薬はインフルエンザによる発熱に対しては効果がない。

7 対抗・抵抗・対処する対象を示す

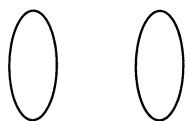
- ・隣国の侵入に対して勇敢に戦った。
- ・このソフトはウイルスの脅威に対して自動的に防御できる。

8 動作の向かう先である対象を示す

- ・シリコン面に対して熱処理を施した。
- ・病人に対してそんなことは言えない。

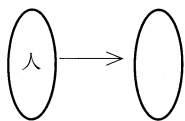
複合助詞「に対して」の意味分類を図で示すと以下のようになる。

A 「二つのものが向かい合う場合」

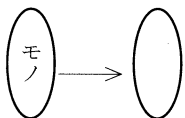


- 1 比較
- 2 照応
- 3 割合
- 4 位置基準

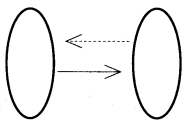
B 「一方が他方を相手とする場合」



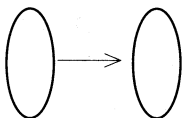
- 5 態度・感情の対象



- 6 反応・作用の対象



- 7 対抗・抵抗・対処の対象



- 8 動作の向かう先である対象

5 他の助詞・複合助詞との関連

5-1 格助詞「を」と「に対して」

市川（1997）は「対象を表す『に対して』の誤用例の中では、（中略）『を』で済ませたほうがよいところに『に対して』を使っているものが多い」と言っている。一般的に言って、感情・態度を表す動詞は「に」をとるものが多く、その場合は「に対して」と言い換えが可能である（柏崎 2005）。しかし、態度を表す動詞でも「に」をとらないで「を」をとる動詞（「尊敬する」、「差別する」、「除名する」、「軽蔑する」など）の場合は、「*祖父に対して尊敬する」のように「を」を「に対して」に言い換えることはできない。ただし、目的語を含めた動作をあらわす句「尊

敬の念を持つ」全体の向かう先として「祖父」を捉え、それを示すときには、「に
対して」を用いて「祖父に対して尊敬の念をもつ」ということができる。下に挙げる
他の例も同様である。

- ・祖父を尊敬する。
- ・*祖父に対して尊敬する。
- ・祖父に対して尊敬の念をもつ。
- ・外国人児童を差別する。
- ・*外国人児童に対して差別する。
- ・外国人児童に対して差別態度をとる。
- ・会費を払わない会員を除名する。
- ・*会費を払わない会員に対して除名する。
- ・会費を払わない会員に対して除名措置をとる。
- ・妻は夫を軽蔑した。
- ・*妻は夫に対して軽蔑した。
- ・妻は夫に対して軽蔑の念を抱いた。

5-2 格助詞「に」と「に対して」

「に対して」が、動詞「対する」の一義的な意味「二つのものが向かい合う」と
いう意味を強く留めた形で使われている傾向が強い場合は「に」に換えにくい。4
章の分類で言えば、意味分類1「比較」、意味分類2「照応」、意味分類3「割合」、
意味分類4「位置基準」は、複合助詞というよりも動詞「対する」本来の形で使わ
れている傾向が強いため、「に対して」を「に」に置き換えにくい。

意味分類8は単に「動作の向かう先である対象」を示しているのであるから、も
ともと格助詞「に」でよいものである。意味分類5「態度・感情の対象」、意味分類
6「反応・作用の対象」については「に」に言い換え可能なものがほとんどである
が、意味分類7「対抗・抵抗・対処・処遇の対象」については、動詞「対する」の
意味合いを強く残している場合は「に」に換えにくいものもある。

動詞として使われているのか、複合助詞「に対して」として使われているのかの
区別は難しいが、格助詞「に」に変えられず、「に対して」でないとならない場合は、
「対する」という動詞として使われていると考えられる。特に、動詞「対する」が
持っている「向かい合う」「応対する」「応える」「対抗する・対処する」などの意
味を強く出したい場合は、下の例文のように「に対して」が使われ、「に」に換え

にくくなる。

- ・どちらを選択しても世界に対して責任が生じる。
- ・内閣は議会に対して連帯して責任を負っている。
- ・若者が国に対してどのような意識をもっているか調査した。
- ・インターネットや携帯電話から配信される有害情報に対して青少年は無防備な状況にある。

佐藤（1989）は、文の中で果たしている機能の特徴から「に対して」を3つに分類し、1番目の機能として、態度の対象のうち対象を「に」では示せず「に対して」でなければならないものがあるとしている。しかし、挙げられている例文「・・・排仏に対して気が弱くなっている」、「・・・世間に対して少しは肩身が広がった気がする」、「なお濱岸氏は、・・・という主張に対して、・・・と述べられており、・・・」を見ると、複合助詞「に対して」ではなく、動詞「対する」そのものが「向かい合う」、「対抗する」などの意味で使われているとも考えられる。佐藤は説明の中で「この態度の対象を提示する用法は『～に対して』の中では用例の数は少ない」と述べているが、それはこれらの例文では動詞として「に対して」が使われているからではないだろうか。つまり、佐藤が「後置詞『～に対して』の機能」の1番目として挙げている機能は後置詞の機能ではなく、動詞「対する」が持っている意味から出たものに過ぎないのではないだろうか。

佐藤が2番目の機能として指摘している「関係の明確化」は、「に」に置き換えることも可能であるが、対象が動詞と離れている場合や、その間に他の語が入り、そこに他の「に」格がつかわれている場合などに、対象であることをより明確にするために、「に対して」が使われるというものである。格助詞「に」は担っている意味が多いために、同一の文の中で「に」格が重なることは往々にしてある。このような場合は、「に対して」を使うと文意が明確になるため、「に」よりも「に対して」が使われる傾向があるのは佐藤の指摘する通りである。

佐藤が3番目の機能として指摘している文体・表現性の問題も「に」と「に対して」の使い分けに関係している。漢語が多く用いられる文や論文などのように公表することが目的である文には、文体として「に」の代わりに「に対して」が用いられる傾向がある。

5-3 「について」と「に対して」

森田・松木（1989）は「について」と「に対して」に関して、入れ換え可能なも

の（つまり、意味にずれが生じない）もあれば、不可能なものもあり、意味にずれが生じるものもあると言っている。「二語の入れ換えが可能なのは、『答える』『反論する』といった対象に作用を及ぼす意味合いの言語活動や、『興味がある』『関心を持つ』『中立を保つ』『不平をもつ』『敬意をいさぐ』などの心的傾向を表す語を修飾する場合である」としている。

一方、意味にずれが生じるものとして、

g 息子について説明する。

h 息子に対して説明する。

の二つの文をあげ、「gでは『説明する内容は息子のことである』の意味で『息子について』は対格（目的格）となり、hでは『説明する相手は息子である』の意味で『息子に対して』は与格となるのである。これは述部に来る用言の意味内容によって左右されることになる」と説明している。

森田・松木は「答える」や「反論する」を入れ換え可能なものとしているのであるが、次の文のような場合、意味のずれが生じる点では例文g、hの「説明する」と同じではないだろうか。

- ・生徒について答える。（外部からの問い合わせなどに）
- ・生徒に対して答える。
- ・同僚について反論する。（外部からのコメントなどに）
- ・同僚に対して反論する。

つまり、意味のずれが生じるか否かは、森田・松木のいうように「述部に来る用言の意味内容によって左右される」のではなく、「について」や「に対して」の前に来る名詞の意味内容によって左右されるのである。ずれが生じるのは、対格と与格の両方を取り得る動詞（「答える」「反論する」「説明する」など）で、「について」と「に対して」の前の名詞が対格と与格のどちらにも意味的に取り得る場合、「について」は対格を表し、「に対して」は与格を表すからである。

森田・松木は「について」と「に対して」で意味のずれが生じない例として、動詞「答える」を挙げ、以下の文を示している。

a 生徒の疑問について答える。

b 生徒の疑問に対して答える。

これは「について」「に対して」の前の語が「生徒の疑問」という与格（相手）にはなり得ないものであるからである。この場合にのみ、「について」と「に対して」が言い換え可能となるのである。

以上の点をまとめると、対格と与格の両方を取り得る動詞であっても、「について」と「に対して」の前の名詞が意味的に与格にはなりえない場合には、「について」と「に対して」が入れ換え可能になると言える。

また、「興味がある」「関心を持つ」「中立を保つ」「不平をもつ」「敬意をいやく」などの心的傾向を表す語の場合は、「に対して」は心的傾向の向かう先としての対象を表し、「について」は心的傾向の対象そのものを限定しているというニュアンスの違いはあるものの、入れ換え可能と言えるであろう。

5-4 「にとって」と「に対して」

「にとって」は「その立場からみれば」という意味を表し、その立場から見た評価を表す表現が続くが、第4章の「に対して」の意味分類5「態度・感情の対象」と混同され、誤用を生むのではないかと思われる。

- ・*この本は私に対して難しすぎる。
- ・この本は私にとって難しすぎる。

意味分類5「態度・感情の対象」は、主体が人でなければならぬ。したがって、「この本」のようなモノが主体ではこの意味にはなり得ない。上記の例文では「に対して」は明らかに誤用となり、「にとって」を使わなければならない。

しかし、次のような文では「に対して」は誤用と言えるであろうか。

- ・この本は子どもにとって有害だ。
- ・?この本は子どもに対して有害だ。

「この本は子どもに対して有害だ」の「子ども」は第4章の意味分類6「反応・作用の対象」と考えることもでき、多少違和感はあるが、「この本は子どもに読まれる時有害になる」という意味を表すことができる。この場合は、「にとって」と「に対して」は同様な意味を表すことになる。

次の二つの例文のように本を修飾する形にすると、「にとって」も「に対して」もより自然な表現になり、同じ意味で使われ得る。

- ・子どもにとって有害な本は規制すべきだ。
- ・子どもに対して有害な本は規制すべきだ。

中国語を母語とする学習者が「にとって」とすべき箇所に「に対して」を使う間違いを犯すのは、「にとって」の中国語訳として「対・・・来说」が使われるのも理由の一つであると思われる。例えば「日本経済にとって」を中国語に翻訳すると「対日本经济来说」というように「対」という漢字が使われる。そこから「にとって」

と「に対して」の混同が生じるとも考えられる。

6 おわりに

複合助詞「に対して」の意味・用法を、理系論文の中での使われ方も含めてまとめ、学習者が誤りやすい「を」「に」「について」「にとって」との使い分けについて考察した。「に対して」は動詞「対する」の意味から、「比較」、「照応」、「割合」、「位置基準」、「対象」などを示す意味があり、「対象」は、さらに、物事や人に応える場合、対抗・抵抗・対処する場合のほか、動作の向かう相手（人や組織やモノ）を特に表明したい場合に細分される。

実際の用例を見ると、文体的に堅い公式的な意味を加味するために「に」の代わりに「に対して」が使われていることが多い。また、「にとって」や「について」と同じ意味で使われているものもある。

数学の教科書（東京外国語大学留学生日本語教育センター1992）には下の例文のような独特な使われ方もあり、「に対して」はかなり広い意味をカバーしていると言える。

- すべての $x \in \mathbb{R}$ に対して、 $\sin^2 x + \cos^2 x = 1$ です。
- $\triangle ABC$ があります。ある点 O に対して、 $OA = OB = OC$ です。

このような独特な用法はあえて分類をせず、学習者に対しては、それぞれの内容とともに「に対して」の用法を習得させる方が賢明であろうと思われる。

本稿では「に対して」の意味と用法をまとめ、他の助詞、複合助詞との使い分けを論じるに留まり、学習者にどのように指導すればよいかという点には踏み込めなかった。指導法に関しては今後の課題とする。

参考文献

- 市川保子（1997）『日本語誤用例文小辞典』凡人社
- 柏崎雅世（2005）『「について」と『に関して』—『に対して』を視野に入れながら—』『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第31号
- 河原崎幹夫ほか（1995）『辞書で引けない日本語文中表現』北星堂書店
- グループ・ジャマシイ（2001）『日本語文型辞典』くろしお出版
- 小泉保ほか編（1989）『日本語基本動詞用法辞典』大修館
- 国立国語研究所（2001）『現代語複合辞用例集』国立国語研究所
- 佐藤尚子（1989）「現代日本語の後置詞の機能—『～について』と『～に対して』を

例として一』『横国大國語研究』7

佐藤尚子他（2001）「社会科教科書における後置詞について」『千葉大学留学生センター紀要』第7号

新村出編（1998）『広辞苑 第五版』岩波書店

東京外国語大学留学生日本語教育センター（1992）『理工系留学生のための基礎数学』三省堂

西尾実ほか編（1986）『岩波国語辞典 第四版』岩波書店

馬場・深尾（2004）「工学系論文に使用される『に対して』の用法分析—科学技術作文指導のために—」『JALT 日本語教育論集』第8号

林巨樹監修（1993）『現代国語例解辞典 第二版』小学館

深尾・馬場（2000）「農学・工学系論文に出現した『に対して』の用法分析」『専門日本語教育研究』第2号

松村明（1993）『大辞林』三省堂

松村明監修（1995）『大辞泉』小学館

森田・松木（1989）『日本語表現文型』アルク

劉曉民（1995）『日本語・中国語慣用語法辞典』日本実業出版社

The Meaning and Usage of “*ni taishite*”

YOKOTA, Atsuko

The meaning of a compound article “*ni taishite*” closely relates to the meaning of the verb “*taisuru*.” Based on the meaning of the verb “*taisuru*,” the meaning of “*ni taishite*” can be broadly divided into two situations, namely the situation that two things face each other and the situation that one deals with the other. The former situation provides four categories: (1) comparison, (2) correspondence, (3) ratio and (4) reference position. In the latter situation, “*ni taishite*” indicates the following four objects: (5) attitude, (6) reaction, (7) resistance and (8) general action.

Learners of Japanese sometimes make a mistake when they use “*ni taishite*.” The usage of “*ni taishite*” is discussed in this paper in comparison with particles “*wo*” and “*ni*,” and other compound particles “*ni tsuite*” and “*ni totte*.”